

祈りは願業成就の原動力

（御書全集一三四七頁十五行目〜同頁十七行目）
 （編年体御書五一五頁十五行目〜同頁十七行目）

されば法華經の行者の祈るいのり祈は響ひびきの音に応ずるがごとし・影の体からだにそえるがごとし、すめる水みづに月のうつるがごとし・方諸ほうしよの水をまねくがごとし・磁石じしやくの鉄てつをすうがごとし・琥珀こはくの塵ちりをとるがごとし、あきらかなる鏡かがみの物の色をうかぶるがごとし

法華經の行者の祈りは、かならず叶かなうことを断言された御文です。

引かれた譬たとえが、いずれも自然の道理、事実の姿であることに、日蓮大聖人の強い御確信をみる思いがします。音には響きが応ずるように、体に影が従うように、法華經の行者の祈りのあるところ、そこに結果がでないわけではない。祈りに応じて、自己の生命の色心にわたる回転が起こり、また依報えほう

もそれに呼応して動くとのおおせであります。

ここで「法華經の行者の祈る祈」と述べられていることに注意をはらわなければなりません。法華經の行者すなわち実践者とは、別しては末法御本仏日蓮大聖人、総じては日蓮大聖人の教えのままに信心修行に励み、広宣流布に邁進する私どものことになるのはいうまでもありません。法華經の行者の祈りは叶う。しかし、爾前權教の人の祈りは、根本的に叶わない。

「諫曉八幡抄」には、つぎのように述べられています。

「此の理を弁へざる一切の人師末学等設い一切經を誦誦し十二分經を胸に浮べたる様なりとも生死を離る事かたし又現在に一分のしるしある様なりとも天地の知る程の祈とは成る可からず」(御書全集五七七頁)

また「撰時抄」には「此の災の根源を知らぬ人人がい^祈のりをなさば国まさに亡びん事疑いなきか」(御書全集二八四頁)と述べられています。

つまり、魔の通力等によって一分のしるしがあつたとしても、天地の知るほどの祈りとはならないし、さらには、より深い苦しみの世界へ入ってしまふということでもあります。すなわち、大宇宙にも響く己心の大回転とはならない。

それに対して、法華經の行者の祈りは、天地に響きわたって、祈ったとおりの方向へと入っていくことができるのです。

祈りとは、けっして觀念ではない。科学万能のものの見方にとらわれた現代人の目からすれば、目

に見えない生命の世界は觀念の産物にすぎないと考えるかもしれませんが、もし物質的な觀點だけでものごとをとらえていったならば、人と人との關係、人とのとの關係の大部分は、偶然の混沌のなかに埋没してしまふでしょう。

仏法の透徹した英知は、その混沌の奥に生命の法を見だし、事象を内より支え、動かしていく力をとらえているのであります。

「命已に一念にすぎざれば仏は一念隨喜の功德と説き給へり」(御書全集四六六頁)とおおせのように、瞬間瞬間に如々として来つて内より自身を支え、本源的な方向性を与えていくものこそが、もっとも問題とされなければならぬわけでありませう。祈りとは、この本源的な世界における唯一の対決のあり方といってよいであります。

したがって、祈りとは、正しい実践、粘り強い行動を貫くための源泉であります。祈りのない行動ほどもろいものはない。それは、あるときは順調で、意氣盛んに見えるかもしれませんが、ひとたび逆境に直面するや、枯れ木のように、もろくも挫折してしまふであります。なぜなら、そこには、わが胸中を制覇するという一点が欠けているがゆえに、現実社会の浮き沈みのなかで、木の葉のように翻弄されてしまふからであります。

人生の坂は、一直線に向上の道をたどるようなものでは、けつしてありません。成功もあれば失敗もある。勝つときもあれば負けるときもあります。そうした、さまざまな曲線を描きつつ、一步一步、成長の足跡を刻んでいくものであります。その過程にあって、勝つて傲らず、負けてなお挫けぬ、強

観^{かん}な発条^{はつじょう}として働くのが、祈りなのであります。

ゆえに、宗教的な祈りのある人ほど強いものはない。ましてわれわれの祈りは、人生への諦観^{ていかん}を助長するような弱さの発露でもなければ、ある種の宗教的ドグマをもって独り善^{ひとよ}しとする、狂信的な祈りでもありません。外にあって人間を支配する神仏の加護を祈るのではなく、わが強盛なる祈りに込めた一念が、信力、行力となってあらわれ、それと相呼応して仏力、法力が作動するのであります。主体はあくまで人間であります。

祈りとは、ある意味で人間の心に変化をもたらしものであると見えます。目に見えないが深いその一人の心の変化は、けっして一人にとどまるものではありません。また一つの地域の変革は、けっしてその地域のみにとどまってははいない。一波が万波をよぶように、かならず他の地域に変革の波動をおよぼしていくのであります。

そうした展転の原点となる最初の一撃は、一人の人間の心のなかにおける変革であると、私は申し上げたいのであります。

仏法は道理である、といわれることの深意もここにあるといつてよいでしょう。譬^{たと}えのなかの「音」「体」「すめる水」等は祈りの姿であり、「響」「影」「水にうつる月」等は、祈りの叶っていく自然な様相をあらわしていると拝することもできます。それらの譬^{たと}えが自然の理法であるように、法華経の行者の祈りは、生命の世界の必然の法として、道理として、かならず叶っていくのであります。

こうした祈りは、傲慢^{ごうまん}や慢心とは、およそ縁遠いものでありましよう。端座唱題の凜然^{りんぜん}たる姿に

は、浅薄な自己の智慧、わずかな経験への執着を乗り越えて、仏の智慧によって見いだされた生命の法、自然、宇宙の根源のリズムに冥合しようとの、謙虚な姿勢が脈打っているものとあります。卑屈にもならず、いっさいの活動を一念へと凝縮し、生命の充電を受けつつ、無限の飛躍を期している。それは人間生命の、もっとも健康にして充溢した姿なのであります。

ともかくも、私どもは、生活の、人生のすべての問題を御本尊に祈りきって、取り組んでいこうではありませんか。

この、すべてを祈り、かちとってきた戦いこそが、個人の人間革命をもたらし、今日の大河の日蓮正宗そして創価学会を築いてきた原動力なのであります。

ゆえに、祈ることが大事であり、そこからいっさいが出発することを忘れてはならないと申し上げたい。事のうえにおいて、祈りを失って、わが生命を回転させなければ、どのようなうまい話をし、高尚な理論を展開しても、それはすべて理であり、夢であり、幻となってしまう。信心といい、学会精神といい、すべて現実を、強く、深く祈ることから始まるといってよいのであります。

仏法の祈りは、たんに祈っていればいいというものではない。満々たる生命力をはらんだ矢が射られていくごとく、行動、実践をはらんでいるのであります。したがって、行動なき祈りは観念であり、祈りなき行動は空転なのであります。

ゆえに、偉大なる祈りは、偉大なる責任感から起こると申し上げたい。仕事に対し、生活に対し、人生に対して無責任な姿勢、どうでもいいという姿勢からは、けっして祈りは起こってきません。

自己のかかわるいっさいに責任をもち、真剣に取り組んでいる人こそ祈りをもつものであります。世の中が厳しいだけに、生活の一つひとつに強い祈りをもって取り組んでいただきたいことをかねて申し上げ、私の講義とさせていただきます。